



# 子育て情報 9月号

平成28年 9月  
桐山女学園大学附属幼稚園

## 感動の夏から秋へ

園長 横尾 尚子

今年の夏は、17日間にわたるリオデジャネイロオリンピック観戦と、甲子園球児の応援で、興奮と感動に包まれたテレビ釘づけ、寝不足の日々でした。「筋書きのないドラマ」と言われるように、スポーツ観戦では、時として深い感動や奇跡の瞬間を目の当たりにすることがあります。日本男子陸上4×100メートルリレー銀メダル獲得の瞬間は、まさに奇跡の瞬間でした。甲子園2回戦での東邦高校(愛知)7点差逆転サヨナラ勝ちも、奇跡と言っていいのかもしれませんが。他にも、リオでの身震いするような感動的なシーンをいくつも思い出すことができます。そして、それらの感動は私達の心に末永く生き続けていくことでしょ。

今回のオリンピックで日本選手団が獲得したメダルは、金12個、銀8個、銅21個の計41個。前回のロンドン大会を上回り、過去最多の獲得数だったそうです。4年後の東京オリンピックへの期待が大いに膨らむところですが、日本中が期待過多になって選手や監督達を追い詰めることがないように、あたたかい応援を送り続けたいと思います。甲子園も、またしかりです。

ところで、私達は、なぜスポーツや芸術に感動するのでしょうか？ そもそも、人はなぜ感動するのでしょうか？感動したいのでしょうか？

国語辞書によれば、感動とは「深くもの感じて心を動かすこと」「美しいものやすばらしいことに接して強い印象を受け、心を奪われること」と定義されています。この「心」は、胸の中にあるのではなく、頭の中にあります。脳は記憶や思考だけでなく、感情もつかさどっています。覚えたり考えたりすることは、人間以外の動物にも可能性がありますが、それに感じたことを絡ませて判断することは、どうやら人間の脳だけの働きのようにです。人間が「感情の動物」と言われる由縁かもしれませんね。この「心」が強く揺り動かされることが「感動」。心が動けば、人は自ら動き出すものです。

感動には、「驚きとしての感動」「達成感としての感動」「充実感としての感動」などがあるそうです。そして、その感動をもたらす誘因として、運動・スポーツ、食べること、病・苦しみからの奇跡的回復、美しい景色、本物の芸術、神への畏敬、献身的・人間的行為などが挙げられています。「子どもの成長」も欠かせないものかと思えます。今日から始まる二学期。運動会やアートギャラリーの秋は、子ども達の成長ぶりがダイレクトに保護者の皆さんの「心」に飛び込んできて、感動のるつぼに引きずり込むことでしょ。ご声援、お褒めの言葉、うれし泣きの涙は、どうぞ惜しみなくお願いいたします。

感動体験には、①やる気やポジティブな思考、自主性・自立性を奮い起こすきっかけとなる。

②思考の転換、視野拡大、興味拡大などによる新しい考え方・価値観獲得のきっかけとなる。

③他者からの愛や慈悲をきっかけに、人間愛や寛容・利他意識に目覚める。

といった効果が指摘されています。強烈な感情体験である感動は、記憶に残り易く、ポジティブな体験であることから、「うれしい」「気持ち良い」といった快感情をともなって幾度も思い出されることから、上述のような効果が出やすいのです。子ども達には、日々の暮らしの中で、たくさんの感動と出会ってほしいと願っています。

感動は、事前の期待と実際に起こったことのギャップから生じるものだそうです。そして、そこにはドラマがあります。甲子園をめざした球児のドラマを一つご紹介します。

下の娘が高校3年生の夏、保育園から中学校まで一緒だった男の子のお母さんから、ほぼ3年ぶりにメールが届きました。「息子が明日、瑞穂野球場で試合に出ます。ゆみちゃんに応援に行ってもらえないかしら」私はそのまま、娘に転送しておきました。そして翌日の夜。メールのことを尋ねあぐねていると、「応援、行ってきたよ。感動しちゃった」と娘。その一言をかわきりに、彼の活躍ぶりをとてもうれしそうに話してくれました。「ピッチャーで、ホームランも打ったんだよ！」「じゃあ、甲子園に出るかもね。絶対応援に行こう！！」。私は、喜び勇んでお母さんに「おめでどうメール」を送りました。それから2日後に届いた返信メールには、「ゆみちゃんが来てくれて、本当にうれしかった。あれはレギュラーになれなかった3年生の引退試合だったの。だから、どうしてもゆみちゃんに応援してほしい。ありがとう」。心がジーンとふるえました。